

『アスンシオンの街角散歩』

パラグアイの首都アスンシオンは、ラプラタ川の支流・パラグアイ川沿いに開けた港町です。16世紀、南米に黄金郷を求めて来たスペイン人が、パラグアイ川を遡って到着した岸辺に、探検の拠点として砦を築いたのが始まりです。

温暖な気候と穏やかな気質の先住民(ガラニ族)に恵まれて街は発展し、植民地者にとっての最初の拠点都市となりました。ブエノスアイレスも、ここから旅立った入植者が後に築いた街ですので、アスンシオンは別名【諸都市の母】とも呼ばれています。

今ではパラグアイの政治経済の中心として発展し、都市圏人口は約250万人に達します。アスンシオンの街を簡単にご紹介したいと思います。



(上:アスンシオン市街。大統領官邸と税関)



古くからのアスンシオンの中心は、セントロと呼ばれる旧市街です。その中でも特に賑やかなのは、白いドームが特徴のパンテオン(英雄廟)がある英雄広場の周りです。

パンテオンには三国戦争(1864-70)などで亡くなった、国の英雄達が供養され、見学者で賑わっています。衛兵に守られており、兵の交代の儀式は見ものです。



(旧市街英雄広場に面するパンテオン:英雄廟)

このあたりは政府機関や銀行、ホテルなどが集まる首都の中心ですが、木陰ではテレレ(水出しのマテ茶)で一服する人の姿なども見られ、ゆったりした南国らしさも感じられます。

パンテオンから川の方へ2ブロック歩くと、緑の多い広場に出ます。広場の右手にはアスンシオン大聖堂があり、正面奥にはピンクの外壁のカビルド(旧議事堂)があります。



(アスンシオン大聖堂)

カビルドはかつては国の議会として使われていた建物で、数々の歴史の舞台になってきました。現在、議会は広場左手にある新しい建物に移り、カビルドはパラグアイの文化や歴史などを紹介する博物館になっています。



(カビルド: 旧議事堂)

広場から2ブロック歩くと、ロペス宮殿(大統領府)が見えてきます。フランスのルーブル美術館をモデルにしたと言われる、アスンシオンを代表する建築です。1857年に当時のロペス大統領の息子の邸宅として建設が始まりましたが、その後に始まった三国戦争と敗戦のため工事途中で放置され、ようやく完成を見たのは建設開始から実に35年後でした。大統領のオフィスとして使われており、2013年には大々的な修復工事が完了し、外見もそれまでの白亜からオリジナル色の薄いピンクに生まれ変わりました。夕方にはライトアップされて浮かび上がります。



(ロペス宮: 大統領官邸)

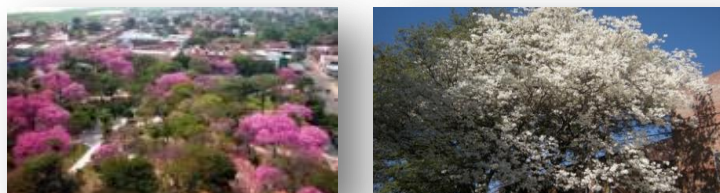
ロペス宮殿から2ブロックのところに、アスンシオン港があります。港からは対岸を見渡せ、視界が開けて気持ちが良いです。パラグアイには海はありませんが、パラグアイ川を通じて大西洋とは繋がっていて、貨物を積んだバージ船が航行しています。川

沿いのコスタネラ大通りには遊歩道や人工ビーチが整備され、週末には散歩やランニング、自転車などを楽しむ市民で賑わいます。ただ近くにはスラムもあるため、特に人気のない時間帯や場所は要注意です。



(アスンシオン港と税関)

パラグアイでは冬場の例年7～9月頃はラパチヨの花の見頃を迎えます。南半球のため季節は日本とは逆です。ラパーチヨは南米に広く分布する広葉樹で、ブラジルではイペとも呼ばれます。花の色はピンク、白、黄などがあり、色によって開花時期が違い、数ヶ月間、順番に楽しめます。アスンシオンでも街路樹や広場などあちこちで見られ、遠目にもとても鮮やかです。またラパチヨの他にも街中に緑が多く、季節ごとにさまざまな花を見られます。



(市街に咲き乱れるピンクと白のラパーチヨの花)

パンテオンから東へ6ブロック行くと、旧鉄道駅があります。19世紀、パラグアイは近代化を推し進め、1860年代には英国の技術を導入して南米で最初(!)の鉄道が開業しました。薪を燃料とする蒸気機関車が運行していましたが、設備の老朽化と自動車の発達で1990年代には運休に追い込まれてしまいます。



(右上・左ともアスンシオン旧駅舎)

駅舎は博物館として公開されており、天井が高い開放的な空間で、南米の先進国だった当時が偲ばれます。レトロな客車もあり、鉄道ファンならずとも一見の価値あります。

市民の生活も垣間見たい方は、市場を覗くのも面白いです。旧市街の南西約2kmにあるメルカド・クアトロは、まさに庶民の台所です。

迷路のように路地が入り組み、野菜や果物、肉などの食品はもちろんのこと、衣類、日用雑貨、電気製品など、ありとあらゆるものが売られています。テレレを飲むための道具やトッピングする薬草もあります。雑然とした雰囲気ですが、いつも混んでいますので身の回り品には注意し、できれば迷わないように詳しい人と一緒がお勧めです。



(メルカド・クアトロ)

毎週火曜には、旧市街の東約5kmの新市街にあるショッピング・マリスカルロペスで、野菜や果物などの産直市(アグロ・ショッピング)が開かれ、近郊の日系農家の方も出店しています。もともと、パラグアイの人達は野菜を食べる食習慣がありませんでしたが、日系農家が中心に野菜栽培を始め、パラグアイの食卓に野菜を紹介してきました。

産直市は一般の店よりも新鮮なことから、パラグアイ人・日本人問わずに人気があります。



(新市街ショッピングセンター)



近年、アスンシオン都市圏ではショッピングモールの新築や増築が相次ぎ、特に旧市街と空港の間にあるモールとその周辺が新たな中心として発展し、買い物やレジャーなどに人が集まるエリアになっています。近くでは新しい高層ビルなどの建設も進み、新市街の発展に拍車がかかりそうです。一方、停滞気味だった旧市街でも、歴史地区としてリバイバルする計画が進んでいて、アスンシオンは今、大きく変わろうとしています。

街の姿はこれからも変わり続けるでしょうが、緑の多い街並みと、パラグアイらしいトランキーロ(穏やか)な国民性は、いつまでも変わらないでいてほしいと思います。

(深山哲夫 在パラグアイ日本商工会議所理事 2015年4月)